平成２８年度　札幌市特別活動研究会

第１５次研究（１年次）事業計画

研究部

１．第１４次研究を振り返って

第１４次研究の成果と課題

札幌市特別活動研究会では、北海道の「どの学校でも活用できる魅力ある実践」「具体的な子どもの育ちに結び付く実践」に向け、特別活動の基礎基本を踏まえながら、それを支える理論を各部会の実践を通して研究を推進してきた。さらに「札幌からの発信」をキーワードに、全市研究大会での授業実践、セミナーの実施、誌上提言の作成、ホームページ等を通して、その成果と課題を全道へ向けて発信してきた。

第１４次研究（平成２５年度～２７年度の３か年研究）では、「一人一人が目的意識や役割意識をもって活動することで、実践力と人間関係形成力を高めることができる」という研究仮説をもとに、全市研究大会（小学校・中学校での授業公開）や部内研などの授業実践、ならびに各部の３年間の実践研究を通して検証してきた。研究部として、第１４次研究の成果と課題を以下のように押さえる。

＜成果＞

○目的意識を高めるための場の設定や手立ての在り方＜実践力＞

○発達段階を踏まえた活動構成や話合い活動の在り方＜実践力＞

○役割意識を高めるための明確な集団決定の必要性

＜実践力・人間関係形成力＞

○話合い活動の３つの段階を踏まえて、４５分間で明確な集団決定をするための教師の関わり＜実践力＞

○実践力・人間関係形成力を高めるための PDCA の重要性

＜実践力・人間関係形成力＞

＜課題＞

◎特別活動で育まれた個や集団の育ちを教科の学習・日常生活に生かすための場の設定や教師の関わり＜実践力＞

◎９年間を見通した計画委員会・学級会の積み上げ＜実践力＞

◎知恵を出し合いながら集団決定に向かう話合い活動の在り方

→個々が自分なりのこだわりをもって本気で話し合い、よりよいものを創り上げようと互いに知恵を出し合いながら話合いを高め合っていく子どもたちの姿を求めていく。＜実践力・人間関係形成力＞

北特活１７次研究を受けて

平成２８年度からスタートする北特活１７次研究のキーワードは、「共に知恵を出し合う」である。札特活の１５次研究でも、このキーワードを踏まえて研究を推進していく。さらに、札幌らしさを大事にしながら、より具体的で分かりやすく、日常の実践に生かせる研究にしていきたいと考えている。

２．研究主題と児童・生徒像

＜研究主題＞
よりよい自己や集団活動を目指して、
共に知恵を出し合いながら主体的に取り組む特別活動

＜児童・生徒像＞
目標に向かって進んで活動に取り組み、
共に支え合い、高め合う人間関係をつくる子

北特活と同じ

３．研究の仮説について

＜研究仮説＞
目標に向かって、支え合い、高め合いながら活動することで、
実践力と人間関係形成力を高めることができる

１５次研究でも、「実践力」・「人間関係形成力」を高める活動の在り方を探っていく。

目標に向かって

「目標に向かって」とは、「よりよい自己や集団の目標を実現するために、仲間と関わり合いながら、主体的に活動に参画しやり遂げる姿」と押さえる。

支え合い、高め合いながら活動する

「支え合い、高め合いながら活動する」とは、「個々の多様性を尊重しながらも、それぞれの違いを強みとして生かし合って活動する姿」と押さえる。

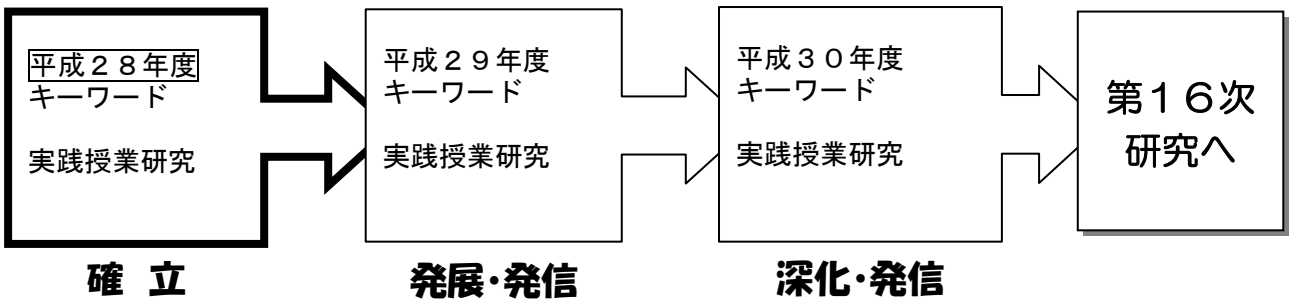
１５次研究では、集団の目標を共有し、その実現に向けて個々が支え合い高め合いながら活動をつくり上げることによって、実践力と人間関係形成力を高めていく子どもたちの姿を、実践を通して検証していきたい。

４．３年次研究の見通し

小中での授業実践を通し組織力アップを

１５次研究は３年次計画とし、各年度のキーワードをもとに授業実践を通し、仮説を検証していく。一年ごとに成果と課題を明確にし、研究の積み上げを図っていきたい。

また、１５次研究でも、小学校探究部会のみならず、中学校部会でも授業実践を行っていく。小中両方で授業実践を重ねていくことにより、両方の組織がある札幌ならではの主張ができると考える。また、全員が小中連携の実態を理解し合うとともに、札特活の組織力を高めていけることにも期待したい。



５．研究の視点

視点１　人間関係形成力を高める活動構成

人間関係形成力を高める

「人間関係形成力を高める」とは、互いの目標を実現するために、活動をつくる過程で互いの考えの違いを尊重し、そのよさを認め合い、生かし合い、そして信頼し合う関係をつくり上げる意識や態度を高めていく姿だと押さえている。相手に依存し、もたれ合うといった相互依存の関係ではなく、個々が互いを自立した存在であることを理解し、相手の立場や考え、人間性を尊重しながら共に心と力を合わせ、より高みを求めていく関係であることが大切である。人間関係形成力は、実践力を高める活動を積み上げていく過程で、共に高まっていくものであると考えられる。子どもたちが互いに支え合い、高め合いながら活動をつくり上げる場の設定や、その過程での教師の関わりが重要となってくる。

支え合い、高め合いながら活動をつくり上げる子どもたちへ

「支え合い、高め合う」とは、個々の多様性を尊重しながらもそれぞれの強みを生かし合う姿と押さえている。よりよい人間関係を形成していくためには、自分と他者の違いを肯定的に捉え、自分にはない他者のよさを認め合うことが大切である。さらに、集団の中でのそれぞれの違いを集団のよさとして、集団活動などに生かしていくことで、互いに高め合う人間関係をつくっていくことができる。個々の違いをよさとしてだけではなく、自分たちの強みとして積極的に生かし合う姿を求めていく。

実践活動を通して集団活動の魅力を実感させる

そのような人間関係形成力の高まりに向けて、第１５次研究でも、集団で共有した目標を実現するための実践活動を通して、集団活動の魅力を実感させることを大切にしていきたい。日常生活で高めてきた人間関係を存分に発揮できるのが実践活動であり、話合い活動において共有した願いや思いを実現していく過程で、個々の思いや考え方の違いが生まれてくるのも実践活動だと考えるからである。その違いやずれを受け止めながら目標を実現していこうと取り組んでいく過程で、子どもたちが支え合い、高め合う必要性が生まれてくる。それを乗り越えてやり遂げることによって、個々の違いを自分たちの強みとして生かすことができたと実感でき、集団の目指す姿に向けて、個々が自分らしさを発揮しながら取り組んでいく子どもたちの姿が生まれていくと考える。１５次研究では、その手立てや教師の関わりを探っていく。

支持的な風土の醸成～発達段階を踏まえた自己評価・相互評価の在り方～

個々が自分らしさを発揮しながら活動していくためには、自己有用感・自己肯定感を高めることや、集団の支持的風土を醸成しておくことが必要である。子どもたちが互いに認め合い、共感的に理解し合う受容的な人間関係を築いていくためには、日常からの教師の関わりが重要となる。学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事など、学校のすべての教育活動において、発達段階を踏まえた自己評価、相互評価を意図的に設定・工夫していくことや、日常からの教師が評価・価値付けを大切にし、子どもたちの自己有用感を高めていきたい。それを積み重ねていくことで、「自分一人ではできないことも、みんなとだからできた」という集団活動の魅力を実感させ、個々の人間関係形成力の高まりにつながっていくと考えている。

以上のことから、人間関係形成力を高めていくために、以下のような実践活動に取り組んでいく。

視点２　実践力を高める教師の関わり

実践力を高める
～一人一人に目的意識と役割意識の明確にもたせる～

「実践力を高める」とは、子どもたちが、よりよい自己や集団の目標を実現するために、仲間と関わり合いながら、主体的に活動に参画し、やり遂げる過程で自己管理能力を高めていく姿だと押さえている。実践力を高めていくためには、集団の一人一人が目的意識と役割意識を明確にして活動に取り組んでいくことが重要である。

目的意識を高めるためには、事前に活動のねらいや集団の目指す姿を共有化したり、集団決定に向かう話合い活動の過程で個々の意識のずれを共感的に理解し合ったりして、集団が同じ目的に向かって活動していこうという意識の共通理解を図ることが重要である。

一人一人が役割意識を高め、主体的に活動していくためには、話合い活動で明確な集団決定が必要となる。共通の目的意識をもち、それを達成するための集団決定がなされ、自分の役割が明確になることによって、主体的に実践活動に取り組むことができるからである。

集団の目標をより具体的に共有する

第１５次研究では、集団の目標をより具体的な姿で共有することを大切にしたいと考えている。自分たちの目標をより具体的な姿で共有することができれば、一人一人がその目標に向けて「自分はどのように取り組んでいくのか」が明確になり、より主体的に取り組む子どもたちの姿が生まれていくと考える。目指す姿を具体的にイメージし続け、自己の成長を実感できるような活動構成を展開することによって、一人一人の自己管理能力や集団の実践力の高まりにつながると考えている。

共に知恵を出し合って､高め合う話合い活動の必要性

そのためには、話合い活動において、集団の目指す姿が具体的なイメージで共有される話合いが展開されなければならない。そこで「共に知恵を出し合って、高め合う話合い活動」を展開していく必要性が出てくる。「共に知恵を出し合って、高め合う話合い活動」とは、子どもたちがよりよい解決へ向けて、問題点を焦点化し、互いに聴き合い、くらべ合い、分かりあう話合いを展開することによって、具体的な目指すイメージを共有し、集団の誰もが納得できる集団決定をしていく姿だと考えている。

PDCA のサイクルで活動を積み重ねる

共に知恵を出し合って生まれた集団決定の実現にむけて実践していく過程で、自己の役割をやり遂げ、集団の目標を達成していくことによって、自己有用感や自己肯定感、ならびに集団への所属意識が高まっていく。そのような体験を PDCA のサイクルで積み重ねていくことによって、子どもたちにより主体的な動きが生まれ、個々の自己管理能力、併せて集団の実践力を高めていくことにつながっていくと考えている。

以上のことから、実践力を高めていくために、以下のような実践活動に取り組んでいく。

６．部会研究の重点

１４次研究の成果と課題を踏まえて、部会ごとに今年度の重点を設定し、研究を推進していく。

部　会	２８年度の重点内容
①小学校学級活動基礎部会	○話合い活動のスタンダードの追求 ～リーフレットの活用・実践の積み上げ～ ○３つの段階を踏まえた（主語を意識した）話合い活動の展開の在り方 ○合意形成のための可視化・操作化・構造化
②小学校学級活動探究部会	○個の意識、集団の育ちの可視化 ○知恵を出し合いながら集団決定に向かう話合い活動の在り方 ○異年齢活動での学びを生かす学級活動の展開の在り方
③小学校児童会・クラブ活動部会	○主体的に活動する委員会・クラブ活動の展開の在り方 ○異学年との関わりを深める教師の関わり
④小学校行事部会	○日常の姿に変容が生まれる行事の展開の在り方 ○児童の自主的、実践的な態度を生み出す評価の在り方
⑤中学校部会	○集団活動を通して実践力と人間関係形成力を共に高める学級活動の展開の在り方 ○話合い活動を通して、計画的な児童・生徒の育成
⑥今日的課題部会	○育てたい力に応じて焦点化を図った全体計画の在り方 ○特別活動ガイドブックの内容の精査及び充実 ～特別活動の基礎基本を発信～

７．研究推進に関わって

各部会月例研	今年度も学級活動部会と他の部会の日程を分け、学級活動部会に誰でも参加できるように設定する。
セミナーの充実 ～会員外へ発信 ～会員内で学び合う場	会員の拡充と特別活動の充実をねらい、会員、会員外の先生方が共に学び合うセミナーを小学校学級活動基礎部会が計画する。また、会員内でも学級活動の基礎基本を互いに学び合う場を計画する。
全市研究大会	今年度は「目的意識・役割意識」をキーワードに、小学校探求部会が中心になって研究を推進し、授業を公開する。基礎部会と探求部会が合同で授業づくりをする場も設定していく。
札幌からのスタンダード発信	各部の実践を札幌からのスタンダードとして、誌上提言を発行する。また、ホームページなどで発信していく。
札道研との交流	特別活動と道徳との関連をより重視し、より効果的な研究が進められるようにしていく。

平成２８～３０年度　札幌市特別活動研究会

第１５次研究の研究構想図

＜時代からの要請＞
○「生きる力」の確実な育成
○生涯学習社会へ向けた「自立・協働・創造」の社会づくり

＜特別活動における今日的な課題＞
○自己管理能力、人間関係形成力、課題対応能力の育成
○特別活動の目標に準じた指導・実践・評価
○各教育内容との関連的な指導の工夫と特別活動の役割の明確化

＜研究主題＞

よりよい自己や集団活動を目指して、共に知恵を出し合いながら主体的に取り組む特別活動

＜目指す児童・生徒像＞

目標に向かって進んで活動に取り組み、共に支え合い、高め合う人間関係をつくる子

研究仮説

目標に向かって、支え合い、高め合いながら活動することで、実践力と人間関係形成力を高めることができる

１４次研究の成果と課題

＜成果＞
・４５分間で集団決定していくための活動構成と教師の関わり
・「目的意識」・「役割意識」を高める活動の在り方
・PDCA の重要性

＜課題＞
・共に知恵を出し合いながら、活動を高めていく話合い活動の在り方
・満足感、成就感を高める活動計画の在り方
・特別活動の経験を日常生活に生かしていくための教師の関わり

自立　　**共生**

視点１
人間関係形成力を高める活動構成

視点２
実践力を高める教師の関わり

確立
＜平成２８年度＞
○研究の視点の具体化
○研究内容の共有化
○後志・ニセコ大会：誌上提言作成

⇒

発展・深化
＜平成２９年度＞
○授業実践の積み重ね
○研究の重点の見直し

⇒

発信
＜平成３０年度＞
○上川・旭川大会：誌上提言作成
○成果と課題を明らかにし新研究の構想を練る

＜各部の研究の重点＞

小学校学級活動基礎部会	小学校学級活動探求部会	小学校児童会・クラブ活動部会	小学校学校行事部会	中学校部会	今日的な課題部会
・話合い活動のスタンダードの追求「 ・３つの段階を踏まえた話合い活動の在り方 ・合意形成のための可視化・操作化・構造化	・個の意識、集団の育ちを踏まえた活動構成 ・知恵を出し合いながら集団決定に向かう話合い活動の在り方	・主体的に活動する児童会・クラブ活動の実践 ・異年齢の関わりを生かす教師の関わり	・日常の姿に変容が生まれる行事の展開の在り方 ・児童の自主的・実践的な態度を生み出す評価の在り方	・集団活動を通して実践力と人間関係形成力を共に高める学級活動の在り方 ・小中の連携を図った計画的な児童・生徒の育成	・育てたい力に応じて焦点化を図った全体計画の在り方 ・特別活動のガイドブックの内容の精査・充実